

## 18・9世紀ドイツの社会経済思想

[今回のテーマ] 啓蒙期ドイツの諸相—軍隊とジェンダーの視点から

世話人 原田哲史（関西学院大学） 大塚雄太（名古屋大学）  
報告者 鈴木直志（桐蔭横浜大学） 弓削尚子（早稲田大学）  
討論者 原田哲史（関西学院大学） 大塚雄太（名古屋大学）  
参加人数 約10名

今回のセッションでは啓蒙期ドイツにこれまでと異なる視角、すなわち軍隊とジェンダーをテーマとする歴史学的視点から接近を試みた。参加人数は多くなかったが質疑応答は活発に行われ、啓蒙絶対主義時代に関する多面的研究の必要性が改めて確認されるとともに、思想史と歴史学の相互交流がもたらす今後の研究進展の可能性を十分に予感させるものとなった。

第1報告（鈴木報告）は「プロイセン啓蒙絶対主義と軍隊—貴族将校と軍事学校」と題され、啓蒙絶対主義・軍隊・ユンカーといった諸概念がいずれも戦後の学界において否定的に捉えられてきた点を再考するものであった。

そこでは、マルクス主義的な経済史などによって看過された論点が発掘されている。第一次大戦からナチズムまでの20世紀的文脈の影響下で再構成されるプロイセン軍隊（ひいては軍隊そのもの）に対する悪しきイメージ・否定的見解を問い直す必要性を提示するにあたって、導きの糸が「将校の教育」という論点に求められた。とりわけ着目されたのは、プロイセン軍の将校エルンスト・フォン・リュヒェル（1754-1823）による軍事教育機関の諸改革である。リュヒェルは脚光を浴びることも少なく軍事史からも否定的に評価されてきた経緯があるが、近年、ドイツの研究者を中心にリュヒェルの研究が「(プロイセン)改革前の改革時代」を焦点として活発化しつつある。こうした啓蒙絶対主義についての軍事学校を題材とする再評価は、国制史・社会史の研究蓄積をもとに展開されたが、そのアプローチの特質は次のように集約される。第1に、市民的公共性を軸に世論の影響力が形成されると同時に既存の体制が「王国」「君主の国」というイメージから「祖国」という抽象的な共同体概念に転換され始めた点、第2に、以上の変化に伴って諸身分が国家の中の身分（職能身分）として構成された点、以上の2点への着目である。さらに啓蒙概念そのものについては、「伝統と知的に対決する文化的変容過程」という社会史的理解を採用する。

この見地から、まず啓蒙と軍隊の関係とその変容が概観された。近世ヨーロッパにおける軍隊は民衆と切断された関係にあり、戦いの経験を基礎とする専門的職業人によって構成される組織体であったが、1750年代以降、「軍隊の啓蒙」の試みが市民的公共性の発展を背景に活発化する。これにより、戦争の学問化（軍事学）の契機が生まれ、軍事の概念も公益と結び付けられて国家学の一部に編入された。そこで啓蒙と教養の担い手として期待されたのが将校であり、それまでの幼年学校とは異なる、軍事学習得のための新しい教育

施設の創設が重要な意味をもつようになった。

こうしたヨーロッパ全体の傾向は、プロイセン軍幼年学校の動向にも読み取ることができる。創設期における教育機能は敬虔主義の影響下にあり、副次的にしか位置づけられていなかったが、七年戦争後には先述した戦争の学問化の流れとタイアップし、その強化の方向がフリードリヒ大王自身によって模索された。とはいえ結果として、当初のプロイセン軍幼年学校は「教養ある将校」の教育・輩出機関として十分な機能を果たし得なかった。リュヒェルはこうした文脈に登場する。彼は、幼年学校および士官学校における貴族学校的性格を払拭し、それらの軍事教育機関への転換を推進した。そこでは汎愛主義が教育思想の基礎とされ、教材の使用や課外時間を設置するなど具体的な改革が進められるとともに、教育機関としての諸制度が確立した。また幼年学校と士官学校および軍を有機的に関連させたことで、卒業生の採用という契機に象徴される一貫性がそこに生み出されもした。こうした彼の諸改革を通じて、教養に重きを置く教育機関が創出され、将校の教育水準は飛躍的に向上した。リュヒェルの社会観に関して言えば、それは国家機械論や職能身分観に表現される通り、フリードリヒ大王の正統な後継者的性格を有すると同時に、「名誉」と「教養」の重視といった新旧両時代の諸価値の融合を特徴とする。リュヒェルの軍事学校改革は、身分制から市民社会への転換期に位置しており、そこに改めて啓蒙絶対主義の多角的評価の必要性を見いだせよう。軍隊の啓蒙とは、まさに啓蒙絶対主義時代の「文化的変容過程」の一環に他ならなかったからである。

第2報告（弓削報告）は「啓蒙期ドイツにおけるジェンダー秩序構想」と題され、啓蒙とジェンダーをめぐる諸問題が展開された。

ドイツ近代市民社会におけるジェンダー秩序の問題は、1970年代のフェミニズム史学によって啓蒙期に始原が求められつつ本格的に論じ始められたが、後期啓蒙主義に対するネガティブな評価が基礎にあった。すなわちそこに通底するのは、啓蒙主義者が女性を家庭・私的領域へと閉じ込めると同時に学問の担い手から除外したのだという認識であり、カントやクニッゲの言説もその証左となっていた。しかし1990年代以降、さらに新しい視点が加わってくる。ひとつは、「非ヨーロッパ世界との接点」、いまひとつが「男のジェンダー」という問題であり、第2報告はその両者をともに視野に収めるものであった。

その狙いを簡単に述べれば、第1の点に関しては、1990年代に提起された植民地支配責任論を端緒に、植民地主義の精神的淵源が1871年以前に求められたという背景（プレ・コロニアリズム）があり、それとの関連で啓蒙主義の非ヨーロッパ観を改めて問うというものである。2点めについては、女性学や女性史における一元的な男性像そのものに反省を加えるということである。男性という概念もまた、近代市民社会の担い手として規範化されていったという論点は看過されるべきではない。もとより「普通」「一般」という言葉に無意識的に埋め込まれた男性性を抽出することの困難性は小さくないものの、近代における男性性の分析必要性はこうしたところにある。これを受けて、非ヨーロッパ世界におけるドイツ市民男性像が、『フェルゼンブルク島』および『新ロビンソン』という小説を題

材としつつ考察された。両者に共通するドイツ市民男性像は、一言でいえばリスペクタブルなそれであるが、他方で『フェルゼンブルク島』における「擬人化された猿」、あるいは『新ロビンソン』における「フライターク」の位置づけ（非ヨーロッパ人の女性化）に、作者の非ヨーロッパ人像に内在する問題性や作為性を読み取ることも可能である。また男性のジェンダーを考えるにあたっては、啓蒙主義が作り出した男性像が「武器をとる男」の男らしさとつながらなかつた点が注目に値する。職業での成功あるいは、十分な公德心を有し家族に関心をもつといったファクターがそこでは重視されたのであった。第1報告にも関連するが、18世紀後半に台頭する「新しい市民層」は、軍人像自体の時代的变化があったものの、軍人とも兵士とも一線を画することで市民性を探求した。そして啓蒙期のジェンダー論者たちもまた、彼ら自身がそうであったように、理想的な市民男性像を「武器をとらない男」に求めたのである。こうした市民男性像が軍事化していくのは、初めてのナショナルな戦争経験としてのナポレオン戦争以降であったと言われる。そこでは「武器をとる男性」像が顕在化すると同時に、「銃後の女性」という規範が生み出されてもいる。だが、1814年に導入された徴兵制への反発に見られるように、なおリスペクタブルな市民男性像と「武器をとる男」の男性性は親和的ではなかつた。したがって、武器と教養を結ぶ英雄像の創出が図られもしたわけである。またフリードリヒ・ヴィルヘルム三世とルイーゼ王妃が体现する市民的夫婦像・家族モデルは、たとえば尊敬の対象でありこそすれ、よき夫でも父親でもなかつたフリードリヒ大王とは異なり、近代のジェンダー秩序形成にとって重要な契機となった。近代におけるジェンダーの二項対立はさまざまな形で規定されるはずだが、それがいったいどのように生成したのかという観点から啓蒙主義を再考する必要がある。

以上が2つの報告の概要である。それらに対する討論者からのコメントとそれへの応答は次のようであった。第1報告に対しては、功績と世襲の関係、および近代徴兵制の抑圧的な性格について、第2報告に対しては、日本の思想史研究におけるジェンダー的観点の希薄さについて、近代市民社会概念の成立局面とその内実について、また『フェルゼンブルク島』における「ユーリウス」の人物像が現実のドイツ市民に対してもつ社会的意味について質問があった。それらに対して、第1報告者の鈴木氏は、徴兵や軍隊の抑圧性のイメージは戦後日本のそれらに対するネガティブなイメージに端を発するのではないか、そして啓蒙絶対主義時代の国家あるいはその共同体性の分析においてはその切り離しが肝要だ、と答えた。また、第2報告者の弓削氏は、カントの言説に内在する男性性の析出という視点の重要性、また近代市民社会論とジェンダー秩序論の形成過程における同時性、娯楽小説に込められたメッセージ性などについて指摘した。フロアからは啓蒙思想がジェンダー秩序に与えた影響についてさらなる見解が求められ、当時の科学的言説が身分制に代わってその根拠を提供したという知見が示された。議論は啓蒙と宗教の関係などにも広がった。

(大塚 雄太)